

## 西省漫詠：文苑

著者	笠間，梧園，含紫樓主人
雑誌名	龍南會雜誌
巻	27
ページ	40-41
発行年	1894-05-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4404">http://hdl.handle.net/2298/4404</a>

二をかへりみる  
止み雲晴れてよ  
しものゝ眼華始め  
定まる

思篇うがゆ子をも  
つて胎翻としたる  
れが爲するべし

半にありければ、さきのうなぬ子らも、次第に去りて、残りたるは、我ばかりありけり。  
萬籟静まりて、白川の瀬のみ音高く、神さびたる宮居の貴さいやまし、覚えぬ。今霄の  
御神樂、神々もいかにうをしく、照覽したまひつらむ。中にも神功皇后は、現神にまし  
ける。つるぎをはかして、三軍に令したまひし、神にしあれば、御感應も、一入なり  
けむと推まづるにあむ、あはれ、かくばかり、貴き神樂の、今日までも傳はりたる、昔  
はいかに、重んじ給ひにけむ。今は、たいうある子らの、よろこぶものと、ぞなれる。末の  
世を、からもいと、うれたきこと、の限あるべくや。

さつきの二日

稼堂植批

西省漫詠

教授 笠間 梧園

辭東京與諸友別

東、靱、春、花、墨、水、涼、風、流、微、逐、十、星、霜、今、霄、忽、  
酌、別、離、酒、始、識、京、城、是、異、鄉、

發橫濱

歌、吹、海、中、夢、已、殘、曉、猿、夜、鶴、促、吾、還、寒、暄、恰、  
好、小、春、節、陪、父、提、妻、向、故、山、

過遠江洋四首

七、十、里、洋、一、望、開、胸、襟、自、與、水、天、恢、亂、濤、雜、

神戸港逢重陽

遙、思、松、菊、向、家、鄉、水、復、山、重、路、尚、長、今、日、豔、

杏、如、奔、馬、直、自、無、人、入、文、來、無、人、入、文、皆、島、名、  
風、雷、驅、雨、鬪、玄、間、一、片、孤、舟、七、十、灘、忽、爾、天、  
明、雷、雨、歇、濤、頭、跳、出、海、南、山、此、夜、雷、雨、故、及、  
風、塵、流、轉、鬢、將、殘、措、大、自、慙、文、思、寒、七、歲、三、  
過、遠、州、海、無、曾、我、筆、起、波、瀾、  
少、小、期、爲、海、外、吟、廿、年、宿、志、已、蕭、森、今、朝、偶、  
破、滄、溟、水、復、被、風、濤、動、壯、心、

留攝南驛。一杯丹釀作重陽。

春日遊大乘寺途上口占

含紫樓主人

菜麦青青々八野村。寺邊有八村。俗云野八村。輕陰霽々弄

晴暄。遊人不復須停杖。直自花間到寺門。

禪關深鎖白雲籠。隔嶺鳥歸紫翠中。香散人

空松院靜。微吹猶恨落花風。

訪麟童和尚座上作。

欲滌紅塵澆來敲古寺。關堂深蒼樹裡僧語

白雲間。花影一泓水。松聲四面山。愛閑借禪

榻。日夕轉忘還。

澹然無色界。不復着浮生。栖鳥已禪意。風林

尚世情。廓虛雲出入。花滿日陰晴。誰識此間

趣。僧分半牀清。

松雲院の藤の花をみてよめる

含紫樓主人

來てみれば法の庭とてむらさきの

雲のたぢひく藤波の花

おのかをまへ子の森の龜より身

の祝にふもしを七つ一うたの中

によみいれてたへといひおこせ

けまはよみて遣しける

けふよりろふしの麓をふみにふめ

雨のふるにも風のふくにも

をりにふせて 硯友會員 閑鷗

根にかへる花ををしとや思ふらむ

わか葉のうれにうぐひすの聲

かへり行く春のうらみや鶯の

音をのみたてゝささふるすなり

春くまてならむる空の夕つく日

のこるも淋し西の山のは

花の色に染めし袂もぬきかへて

けさうらかさし蟬の羽衣

花鳥の色香もけさは夏衣

まろへし春の袖をしるおもふ